

メルヴィルとタヒチ

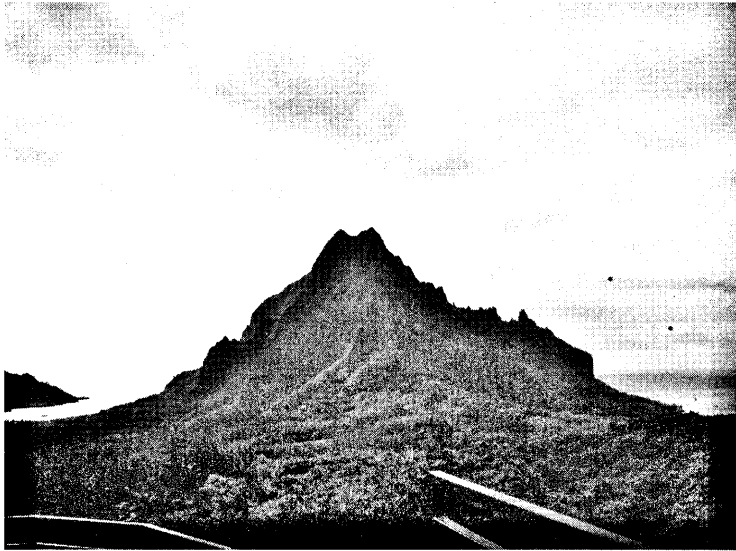
齋木郁乃

(Ikuno Saiki)

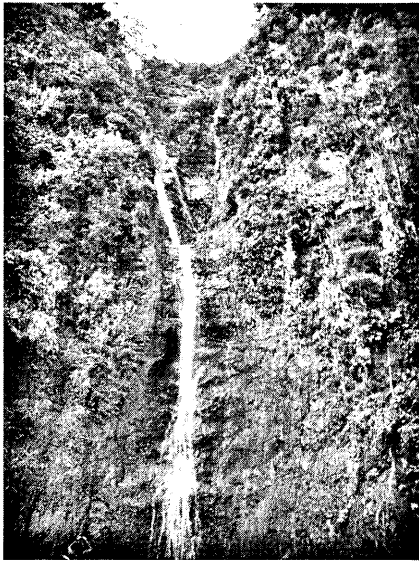
1842年の夏、地上の楽園と言われるタヒチに、23歳の平水夫だったメルヴィル (Herman Melville) は囚人としてやってきた。ルーシー・アン号 (the Lucy Ann) 上で起きた暴動に加わったと疑われて拘束されたメルヴィルは、「他の囚人たちと共に手かせをつけられ原住民の付き添いのもと上陸し、パピエテ (Papeete) の絵のように美しいブルーム通り (Broom Road) を行進した」という (Robertson-Lorant 112)。メルヴィルらはカラブーザ・ベレタニー (Calabooza Beretance) と呼ばれるイギリスの監獄に入れられるのだが、囚人とは名ばかりのもので、仲間と共に自由に海辺を歩いたり、酒を飲んで騒ぐことすら許されていた。ハーシェル・パーカーも述べているように、「タヒチでの日々はメルヴィルの人生の中で最ものおんきで楽しい時間だった」ことだろう (226)。その気楽さがタヒチを舞台にした放浪者 (beachcomber) の物語『オムー』 (*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, 1847) のメルヴィルの他の作品には見られない陽気な語りにもあらわれている。

他の多くのタヒチを訪れた西洋の冒険家や芸術家と同じように、メルヴィルもまた、まずはタヒチの美しい自然に魅了された。『オムー』の18章では、海から見たタヒチ島の景色を妖精の国やエデンの園に喩えて描写する。

Seen from the sea, the prospect is magnificent. It is one mass of shaded tints of green, from beach to mountain top; endlessly diversified with valleys, ridges, glens, and cascades. Over the ridges, here and there, the loftier peaks fling their shadows, and far down the valleys. At the head of these, the waterfalls flash out into the sunlight, as if pouring through vertical bowers of verdure. Such enchantment, too, breathes over the whole, that it seems a fairy world, all fresh and blooming from the hand of the Creator.



モーレア島 (Moorea) 高台からクック・ベイ (Cook Bay) を臨む。



タヒチ島 (Tahiti) のバイマフタ滝 (Vaimahuta)。

Upon a near approach, the picture loses not its attractions. It is no exaggeration to say that, to a European of any sensibility, who, for the first time, wanders back into these valleys—away from the haunts of the natives—the ineffable repose and beauty of the landscape is such, that every object strikes him like something seen in a dream; and for a time he almost refuses to believe that scenes like these should have a commonplace existence. No wonder that the French bestowed upon the island the appellation of the New Cytherea. “Often,” says De Bourgainville, “I thought I was walking in the Garden of Eden.” (66)

(海から眺めると、壮大な光景だ。海岸から山頂までが、暗い緑色のかたまりで、谷、尾根、峡谷、滝と無限に変化する。尾根の向こう側にはあちこちにそびえ立つ峰が影を投げかけ、遠く下に谷を臨む。谷の頂きには滝がまるで垂直の緑の木陰を通るかのごとく陽光へと光りながら注ぐ。このような魅惑がまた、島全体に息づいているので、まるで創造主の手によってまったく新しく花開いたばかりの妖精の国のように思われる。

もっと近づいてもその景色が魅力を失うことはない。少しでも感受性のある欧州人なら、初めてこの谷の奥へと一原住民の住むところから離れて—さまよい戻るとき、この風景の言いようのない静寂と美を前にして、あらゆるものが夢の中で見るもののように心を打つと言っても過言ではない。フランス人がこの島に「ニューキテレイア」という名前をつけたのももったもなことだ。ブーゲンヴィルは言う、「私はエデンの園を歩いているのだと思っ

た」と。) 第1パラグラフの風景描写は、島が深い緑色の塊に見えたり、そびえ立つ峰と深い谷の落差を滝の流れがつかないでいたり、筆者がタヒチを訪れた時の印象とも一致する、タヒチの典型的な景色をとらえている(写真参照)。また、西欧文明がまだ行き渡らない南海の島々を、天地創造の原初の風景をとらえるのは「感受性のあるヨーロッパ人」たちの慣習的な準拠枠であり、そこには必ず文明の進んだ西洋世界から原始的な未開の地へ「さまよい戻る」(wander back) という西欧中心主義的な価値観が潜んでいる。

前作『タイピー』(Typee: A Peep at Polynesian Life, 1846)に引き続き、『オム—』においてもメルヴィルはヨーロッパの宣教師たちの横暴ぶりを辛辣な皮肉をこめ

て描き、無垢なタヒチの原住民が改宗させられることでかえって人間として墮落していく可能性に警笛を鳴らしている。と同時に、タヒチの原住民たちが時として宣教師たちの思惑を転覆させるような態度をとる様子をユーモアを交えて描いている。

『オムー』の45章では、イギリスやフランスの宣教師による布教活動がタヒチの原住民の生まれ持った資質によって事実上失敗していることが述べられる。

In fact, there is, perhaps, no race upon earth, less disposed, by nature, to the monitions of Christianity, than the people of the South Sea.... An air of softness in their manners, great apparent ingenuousness and docility, at first misled; but these were the mere accompaniments of an indolence, bodily and mental; a constitutional voluptuousness; and an aversion to the least restraint; which, however fitted for the luxurious state of nature, in the tropics, are the greatest possible hindrances to the strict moralities of Christianity. (174-75)

(実際、南海の人々ほど生来キリスト教の戒めに向かない人種はおそらくこの地上にいないだろう。(中略) 彼らの物腰の柔らかさ、ありありと目に見える率直さと従順さが、まずは誤解をもたらした。しかしこれらのことは、肉体的、精神的な怠惰や生まれつきの官能、ほんのわずかな抑制すら嫌悪する、といったことの単なる付属品に過ぎないのだ。そういう気質は、いくら熱帯の豊かな自然にぴったりだと言っても、キリスト教の厳格な道徳には最大の障害となるのだ。)

ここでメルヴィルがあげるタヒチ人の性質が、怠け者、官能的、自由奔放といった西洋人の目から見たステレオタイプの原住民像をなぞっているという点は気にかかるものの、そうした原住民の性質が「熱帯の豊かな自然」によって育まれたものであり、「キリスト教の厳格な道徳」にはそもそも不向きなのだと断言している点に着目したい。タヒチ人はしたたかに、好き勝手にキリスト教を自分たちの気質に合うように作り替えていく。例えばキリスト教の安息日を「タブーの日」(“Taboo Day”)と現地の宗教的な言葉で呼び変え、仕事をしないという点に限っては「徹底的に遵守」することでその怠け者気質を満足させるのだ(176)。

44章では、タヒチ人がポマレ2世(Pomaree II)の時代に建てた「南海の大聖堂」(South Sea cathedral)と呼ぶ礼拝堂について、次のように説明する。

As well for the beauty as the advantages of such a site, the islanders love to dwell near the mountain streams; and so, a considerable brook, after descending from the hills and watering the valley, was bridged over in three places, and swept clean through the chapel.

Flowing waters! what an accompaniment to the songs of the sanctuary; mingling with them the praises and thanksgivings of the green solitudes inland.

But the chapel of the Polynesian Solomon has long since been deserted. Its thousand rafters of hibiscus have decayed, and fallen to the ground; and now, the stream murmurs over them in its bed. (169)

(美しさと利便性を求めて、島民たちは山の小川の近くに住むのを好む。そのため、山々を下り谷を水で潤し、3つの橋が架かった大きな川がその礼拝堂の真下を流れていた。

豊かな水音！神聖な場の合唱に何という伴奏だろう。その歌に混じって緑深い奥地の孤独を讃え感謝する祈りが聞こえたことだろう。

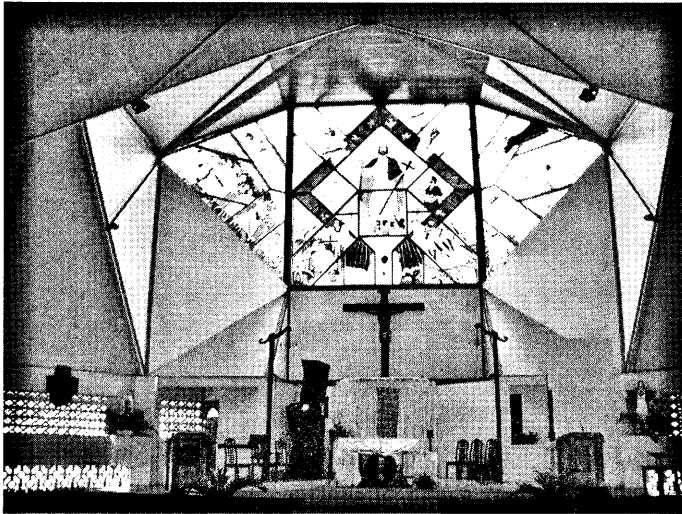
だがポリネシアのソロモンの礼拝堂は長い間捨て置かれた。その何千ものハイビスカスの垂木は朽ち果て、地面に落ちてしまった。そして今では、小川が川底の垂木の上をさらさらと流れている。)

この教会の描写から、キリスト教の布教によってタヒチ人たちの生活が損なわれたのではなく、むしろキリスト教の方がタヒチ人の暮らしにあわせて変化させられていったことが読み取れる。礼拝堂はもともと島民たちが暮らしていた川の上に建てられ、そこでは水音を伴奏に島の緑の静寂を讃え、自然の恵みに感謝する祈りが捧げられ、人々の暮らしが変化すると建物は自然にかえっていく。タヒチの自然が刻む力強い時間は、宣教師の侵入程度のことではなんの影響も受けず、人々の暮らしもまた豊かな自然に守られるように粛々と続いていく。

筆者がボラボラ島で偶然見かけた教会は、まさにそのような豊かな自然と一体化するように作られていた。質素だが手入れの行き届いた内外の様子はキリスト教が現地に根付いていることを窺わせるものであった。しかしながら他方では、建物の後ろに堂々とそびえる山が、祭壇の上部のガラス部分を通して透けて見える作りになっているところから、西洋の宗教をただ鵜呑みにするのではなく、キリスト教の神に祈りながらも同時に土着の神にも敬意を表することができるといった折衷的



ボラボラ島 (Bora Bora) にある小さな教会。背後の切り立った山の風景と一体化するように建つ。



同じ教会の内部。ステンドグラスを通して背後の山が透けて見える仕組みになっている。

なタヒチの人々の創意工夫があらわれているように思われた（写真参照）。

南海の冒険談でデビューしたメルヴィルが作家として円熟期に入った『白鯨』(Moby-Dick; Or The Whale, 1851) においても、海の中の弱肉強食を描いた 58 章の結論部分で、人間の精神を象徴するものとしてタヒチが登場する。

Consider all this; and then turn to this green, gentle, and most docile earth; consider them both, the sea and the land; and do you not find a strange analogy to something in yourself? For as this appalling ocean surrounds the verdant land, so in the soul of man there lies one insular Tahiti, full of peace and joy, but encompassed by all the horrors of the half known life. God keep thee! Push not off from that isle, thou canst never return! (274)

（このこと全てを考えよ。それからこの青々として穏やかで最も従順な陸の方を見よ。海と陸の両方について考えよ。自分自身の中にあるものとの奇妙な類似に気がつかないか？というのは、このぞっとするような海が緑の陸地を取り囲むのと同じように、人の精神の中にもタヒチの島が一つ、静穏と歓喜に満ちている、だがまだ半分しかわからない人生の恐怖に取り巻かれてそこにあるのだ。神よ、汝を守りたまえ！その島から突き落とすな、落ちたら汝は二度と戻ってこられないのだから！）

この引用の中で、「静穏と歓喜に満ちた」タヒチは、人間の精神の海の中に浮かぶ正気を保つための唯一の確固たる拠り所として描かれている。陸には興味を引くものが何もなく、世界を見るために海に繰り出したイシュメールも、安寧の場としての心の中のタヒチを見失ってしまえば、海を漂うピップのごとく恐怖に取り込まれて狂気へと向かってしまうのだろう。まだ半分明らかにならない人生の恐怖に取り巻かれて書き続けるメルヴィルにとって、唯一の心の安定と喜びをもたらしてくれるものの象徴が若き日に放浪したタヒチだったのだ。

晩年のメルヴィルにとって南海の島々は、嵐の吹きすさぶ文明社会とは対照的な穏やかで緑鮮やかなパラダイスのような場所として懐古されている。タヒチの島々を舞台に書かれた詩と言われる『羨望の島々』（“The Envious Isles”）は、若き日のメルヴィル自身のように、文明社会から島の内部に入り込んだ人の視点から、時間から解放され眠りのような恍惚感に包まれた島の様子を懐かしむように歌っている。

The Enviaible Isles
(from "Rammon")

Through storms you reach them and from storms are free.
Afar descried, the foremost drear in hue,
But, nearer, green; and, on the marge, the sea
Makes thunder low and mist of rainbowed dew.

But, inland, where the sleep that folds the hills
A dreamier sleep, the trance of God, instills—
On uplands hazed, in wandering airs aswoon,
Slow-swaying palms salute love's cypress tree
Adown in vale where pebbly runlets croon
A song to lull all sorrow and all glee.

Sweet-fern and moss in many a glade are here,
Where, strown in flocks, what cheek-flushed myriads lie
Dimpling in dream-unconscious slumberers mere,
While billows endless round the beaches die.

羨望の島々
(「ラモーン」より)

数々の嵐をくぐり抜け辿り着く嵐のない島々。
遠くから眺めると、この上なく陰鬱な色をしているが
近づくと、緑、そして、まわりには海が
低く轟き、七色の露の霧をつくる

けれども、奥地では、山々を包み込む眠りが
夢誘う眠気を、神の恍惚を、しみこませる—
ぼんやりとかすむ高台では、さまようそよ風の中で気が遠くなり

ゆっくりと揺れる椰子の木は親愛なる糸杉に挨拶をする
下の溪谷では小石だらけの小川がささやくように歌う
あらゆる悲しみと喜びを鎮める歌を

ここには幾多の沼地がありヤマモモや苔が茂る
そこには、群れになって点々と、なんと無数のバラ色の頬の人々が
横たわることか
夢を見ながらえくぼを見せて微笑んで一ただ意識なく眠る人々
浜辺を囲み絶え間なく打ち寄せる波がかすかになっていく

ジョン・ブライアントは、この詩を「メルヴィルの『退行する』ピクチャレスクの瞬間」をとらえた作品だとし、「海岸線における海と陸の結合によって象徴されるピクチャレスクと崇高 (sublime) の巧妙な融合が、人生における認識と喜びに符合する」が、「過剰な抑制の危険性」という「倫理的なジレンマ」も提示していると述べる (18)。確かにブライアントが言うように、島々に充満する「眠り」は人間の知性を「完全なる休止 (full repose) に追い込む危険性があるものとして描かれている。しかしながら、メルヴィルはこの知性の「完全なる休止」を恐れてはいなかったように思われるのだ。

私はこの詩がエミリー・ディキンソンの『私は死のために立ち止まらなかったの』(Because I could not stop for death) の詩のように、死を終わりではなく永遠ととらえるような、恐怖を持ってではなく温かく受け入れるような気持ちを歌っていると考える。第1スタンザでは、遠くから見ると「この上なく陰鬱な色」をした島も、近くに寄れば「緑鮮やか」で「嵐とは無縁」であり、波打ち際には「七色の霧」がかかる、美しく穏やかな地であることがわかる。まるで迎え入れられる前は恐ろしく荒涼としているように思われる死後の世界も、辿り着いてしまえば静謐で心地よい場所だと言っているかのようである。第2スタンザでは、「山々を包み込む眠り」が「神の恍惚」にまで高められ、木々のざわめきや小川のせせらぎによって喜びや悲しみといった感情の起伏が均され静められていく様子が歌われる。第3スタンザで登場する眠る人々は、「バラ色の頬」をし、「えくぼを見せて微笑んでいる」ことから、島の外側、すなわち文明社会の嵐から解放されたことを喜び、穏やかな気持ちで幸福な眠りにについていることがわかる。浜辺に打ち寄せる波が「かすかになっていく」

(die) とは、人々の意識が完全になくなる、すなわち死を意味しているのかもしれないが、死が完全なる終わりにとらえられているのではないことは、打ち寄せる波が「終わりのない」(endless) と形容されていることからわかる。メルヴィルは、タヒチを命の帰っていく場所と考えていたのかもしれない。文明の中で生きるメルヴィルから見れば、タヒチは「うらやましいほどすばらしい」(enviable) パラダイスであり、死後に帰るべき楽園として彼の心の中で生き続けていたに違いない。

*写真は全て筆者が2011年8月にタヒチを訪れた際に撮影したもの。

引用文献

- Bryant, John. *Melville and Repose: The Rhetoric of Humor in the American Renaissance*. New York: Oxford UP, 1993.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; Or The Whale*. Evanston and Chicago: Northwestern and Newberry Library, 1988.
- . *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*. Evanston and Chicago: Northwestern and Newberry Library, 1992.
- . *Selected Poems of Herman Melville*. Ed. Henning Cohen. New York: Fordham UP, 1991.
- Parker, Harshel. *Herman Melville: A Biography, Vol. 1, 1819-1851*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1996. Print.
- Robertson-Lorant, Laurie. *Melville: A Biography*. Amherst: U of Massachusetts P, 1996.

(東京学芸大学 准教授)